

子どもの「訴え」を聴くということ

教育研究所所長 佐伯 胖

子どもはたえず何かを求めている。「〇〇が欲しい」とか「△△はイヤだ」とか、口で言う場合もあるが、何も言わずにただ「行動」で示している場合もある。単純に言い換えれば、「何らかの対象に向かって“接近”しようとしているか“回避”しようとしている」ということである。それが大人や教師の「こうあってほしい」という期待から外れていれば、「わがままだ」、「身勝手だ」とされて否定的な措置がとられ、逆に、大人や教師の期待に即していれば、「自主的だ」、「主体的だ」とされて大いに推奨されたりもする。

そのような、子どもが示す行為を大人や教師の勝手な評価で「よい」とか「わるい」とか判断してしまう前に、まず、大前提として、どんな子どもも（むしろ、すべての人は）、「よく生きようとしている」としてはどうだろうか。ただ、どのような行為がよく生きようとする行為なのかは、その子ども本人も、またそれを見ている大人や教師も、はっきりとは「わからない」のである。

そこで大切になってくるのは、まさに「声なき声を聴く」ということである。つまり、子どものどんな行為にも、背後に、あるいは心の奥底に、「よくありたい」という願いがあり、自分も、かかわる他者（ヒト、モノ、コト）も「よくあってほしい」という訴えがあり、それを聴くということである。

ここで、「訴え」としたのは、それは単に心の奥底に「ある」ということではなく、かかわる他者（ヒト、モノ、コト）に聴き入ってもらいたいという願いがこもっているということである。つまり、根源的に「二人称性」（「わたし」と「あなた」の関係）が前提にあるということである。

子どもの「訴え」を聴く、ということは、子どもの背後（あるいは心の奥底）に、「訴え」があるはずと信頼し、それを何としても「聴く」という決断（覚悟）があってはじめて、「訴え」はきこえてくるのである。むしろ、「訴え」というものは、他者の「訴えを聴く」かかわりを通してはじめて、「浮かび上がってくる（きこえてくる）」ものなのだ。